

## ■ブラームス／交響曲 第1番 八短調 Op.68

グリーグの協奏曲が耳に残っているうちに、ブラームスの交響曲第1番をきくと、こちら冒頭がティンパニの連打で始まるところに既視感があるかもしれない。グリーグのティンパニが独奏ピアノの登場を盛り上げるドラムロール風であるのに対し、ブラームスのティンパニはあたかも悲劇が近づいてくる足音のように拍を刻むので、実際の音型はかなり異なる。しかし、どちらの曲も冒頭に短調の悲愴な雰囲気立ち込める点でも共通している。

交響曲はベートーヴェンの9曲が成し遂げた革新ののち、しばらくかえり見られず、ブラームスの頃にはやや時代遅れとなっていた。その衰退しつつあったジャンルを復活して、ブルックナーやマーラーらによる後期ロマン派の交響曲ブームのきっかけを作ったのがヨハネス・ブラームス（1833-1897）である。ブラームスの生きた19世紀後半、オーケストラ音楽の花形だったのは交響詩、あるいは標題交響曲である。リストからベルリオーズ、リヒャルト・シュトラウスへと連なる先進的な作曲家たちは、どのように性格的な音楽を繋ぎ合わせ、どのように絵画的な管弦楽法を駆使するのかを競って、進歩的であることを示した。ところが、ブラームスは賢明にもそうした思潮に背を向け、2管編成の古典派風のオーケストラこそ、自分にふさわしいものと考え、派手な色彩的楽器法や重厚濃密なテクスチャを避けている。

交響曲第1番の冒頭、ティンパニの打音に乗せて、息の長い半音階をうねうねとのぼっていくメロディは非和声音から生まれる緊張感や不穏な響きに満ちている。つまり、編成や形式こそベートーヴェンの伝統に多くを負っているものの、ここには不安定で微妙な心理や個人的なメッセージを表現しようとしたブラームスの意図が明示されている。主題のほとんどを和声音でがっしりと作り、全人類に向けて音楽的メッセージを送ろうとした安定感のあるベートーヴェンの音楽に対して、ブラームスは移ろいやすく繊細な情感をこの形式に結実させようとした。第1楽章の展開部は遠い調から始めることで、調和した世界を大胆に破っている。抒情的な第2楽章は長調で書かれているのに、どこことなく哀愁を帯びた緩徐楽章。続く第3楽章の主題は4小節でひとまとまりをなしていた伝統的な型を大きく破っている。明るい表情をもつトリオはごく親しい人と話すような雰囲気に貫かれている。そして第4楽章はまず序奏でホルンに現れるのが、クララ・シューマンの誕生日のために書いた歌からの楽想の変形。伝統的な狩りの楽想とは異なり、耳に残る。主部はソナタ形式で、展開部を置かない独特の形態だが、再現部に変奏の手法が凝らされていて、展開部の役割も担っている。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

※スコア上の表記